「あさがお日記」を活かした作文指導

作文指導の原点は一年生の「あさがお日記」です

あさがお日記、絵日記、読書感想文など
文章を書かせる宿題も多くなるこのごろ、
子どもたちがいきいきした文章を書くための
作文指導のポイントを、白石範孝先生に伺いました。

筑波大学附属小学校教諭
白石 範孝
しらいし のりたか＊1955年鹿児島県生まれ。東京都の小学校教諭を経て、現職。國學院大學栃木短期大學講師、使える授業ベーシック研究会会長、全国国語授業研究会理事、国語ICT研究会会長。著書には、『おいしい国語授業レシピ』（文溪堂）ほか多数。

「書き方」を教えていますか？

「子どもたちは、なかなか作文がうまく書けない」という悩みを、先生方からよく聞きます。

そのとき、わたしは、

「本当に書けないのですか。もしかしたら子どもたちは、どう書けばいいのかがわからないだけではないですか。作文の書き方を、きちんと教えていらっしゃいますか」

ということを申し上げています。

もしかしたら、単に「わかりやすく書きましょう」「詳しく書きましょう」といった漠然とした投げかけだけに終わってしまってはいないでしょうか。それでは、いつまでたっても子どもたちは、先生が期待されているような作文が書けるようにはなりません。

子どもたちは、どうしたらわかりやすくなるのか、詳しく書けるのか、具体的な方法がわからないから、思うように書けないでいるのです。

これは、作文に限った話ではありません。読み方、聞き方、話し方も必ず「具体的な方法」を教えることを意識すると、子どもたちがグンと成長するのを感じることができるのです。

「あさがお日記」を作文指導にも活かす

わたしが作文指導のひとつとしてよく取り上げるのに、一年生の生活科で取り組む「あさがお日記」があります。

生活科におけるあさがおを育てる活動は、自然とのふれ合いや四季の変化を感じることを目的としていますが、ものごとを見て、感じたこと、わかったことを表現するという体験を、それだけで終わらせてしまったのでは、あまりにももったいないように思います。

例えば、あさがおの種を観察し、「黒いね、小さいね」だけで終わってはいないでしょうか。これでは、せっかくの観察する力、表現する力を伸ばすチャンスを棒にふっています。

わたしはまず、「ぬり絵」をさせます。あさがおの種の形だけを線画したものを配り、手元の種を見ながら色を塗らせるのです（上3図）。そのとき、「あさがおの種は本当に黒一色だけでいいのかな。」と、投げかけてみてください。子どもたちは「わぁ、いろいろな色が混じりあっている！」と目を輝かせ始めることでしょう。それまでは単に「黒」だと思っていた種の色が、実は茶や灰色、ものによっては白や黄などの部分もあることに、子どもたちは気づくのです。

実は文章も同じです。ただ漫然と見るのではなく、具体的な着眼点をもって見ることにより、深く、詳しい気づきに基づく文章が書けるのです。

全体像しかかけないのは

ものごとに焦点をあてて観察することも大切です。

あさがおの子葉が開いたころ「あさがおが育ってきたから、観察して絵をかいてごらん」と言うと、ほとんどの子どもは2の作品

「焦点化」がポイント

「全部を見なくていいんだよ。見たいところを、虫めがねで見るような気持ちでよく見て、絵や文にかいてごらん」

こんな指導をしてみてください

同じ時期にかいた二人の作品です。1の作品は、絵も文章も子葉の様子に焦点化しています。2の作品は、鉢全体を描いてしまい、焦点化ができていません。ただし、このような場合でも否定的なコメントは避け、「今度は葉を中心に見てみよう」など次回につなげる指導で、子どもの意欲をそがないよう注意しましょう。

あさがおの種のぬり絵

筑波大学附属小学校
白石範孝の国語
おいしい授業レシピ
子どもと教師の喜びがあふれる授業レシピ！

B5変型判 128ページ
（文溪堂）定価1,680円

のように、あさがおが植えられた鉢全体を描いてしまいます。中には水やり用のじょうろまでかいてしまう子どももいます。

「あさがおを育てている様子」を表したいのであれば、そういったかき方もあるとは思いますが、「観察して絵にかきなさい」と言うと、常にそのような絵になってしまうのであれば、問題です。

なぜならば、常に全体像しかかかないということは、「今日はあさがおのここを見てみよう」という意識がはたらいていないということだからです。

観察とは、ただ眺めることではありません。「葉はどうなったかな」「つぼみはできたかな」という具体的な視点をもって見ることです。具体的な観察の視点を教師から与えられていないため、ただ漠然と「観察」しているだけになり、鉢まで描く全体像ばかりになってしまうのです。

このことは、「文章」についても全く同じことがいえます。

事実の羅列のみの文章をよく見ます。羅列になってしまうのは、何について書くべきなのか、その焦点化ができていないからです。

焦点化をすることによって、自分がどんなことに最も関心をもったのか、心を動かされたのかが自然と明らかになり、文章も書きやすくなります。

それは同時に、「なぜ」「どうして」という、原因や因果関係を考える思考にもつながっていくのです。

具体的な記述を引き出す

観察したことを詳しく書くことが大切なのはいうまでもありませんが、そのポイントは「比較思考」と「比喩」です。例えばあさがおのつぼみを観察したとき、「大きくふくらんできました」だけでは、相手に具体的には伝わりません。

わたしは、まだ長さや大きさの測定を具体的に学習していない一年生の子どもたちには、自分の手や指の大きさ、長さ、太さなど身近なものと比較することで、大きさや長さを具体的に表現させるように指導しています。

言葉で比較
絵で比較

「前にさいた花と比べてごらん。」「今日は、花やつぼみの大きさや長さを、自分の手や指と比べてみよう。」

こんな指導をしてみてください

4

5

4の作品は、花を中心に観察した様子がよくわかり、以前にさいた花や自分の手の大きさと比較した文章も書けています。5の作品は、つぼみの大きさを自分の指と比較、さらに形状については、ソフトクリームに例える比喩表現も用いられています。

大きさや長さだけではありません。色や形についても「まるで……のような」といった言い方を指導します。

左ページ5の作品のように、「大きさは、まわりのみどりより大きくなり、小ゆびのながさにちかくなりました。」「ソフトクリームみたいで」といった、比較や比喩の表現を取り入れることができています。

文章の基本構造は具体と抽象の行き来

これらのことは文章の基本構造のひとつである「具体と抽象の行き来」の初歩でもあります。

文章の多くは、具体と抽象の行き来によって成立しています（右下図）。ときどき、出来事だけを書き連ねた作文を見ることがありますが、これではそのときの心は何も伝わりません。具体のみで抽象（自分が感じたことや考えたこと）が折りこまれていないからです。

具体と抽象の行き来があるからこそ、深みがあり、相手によく伝わる文章となるのです。

さらに、具体を抽象化した言葉で表現することで、個性的な表現力も育ちます。

「あさがお日記」でも同じことがいえます。

子どもたちが感じた「小さくてかわいい」「どんどん大きくなって驚いた」などの感想を書くことは大切です。でも、それに加えてどれくらい小さいのか、どの程度大きくなったのかが具体的にわかる書き方を工夫させることで、文章の中に具体の要素と抽象の要素の両方を盛り込んでいくトレーニングになるのです。

●具体と抽象の行き来の例●

大きな、きれいな花がさきました。 抽象
▼
色はいちごのようにまっ赤で、大きさはぼくの手のひらくらいです。 具体
▼
あさがおが元気に育ってうれしいです。 抽象

比較思考は物語の鑑賞にも

これらのことは、作文指導においてだけではなく、国語の授業の様々な場面で活かすことができるのです。

「比較思考」を物語の鑑賞に取り入れてみてはいかがでしょう。例えば共に不思議な世界を描いた『注文の多い料理店』と『つり橋わたれ』を比較し、似ているところと違っているところを探してみます。それによって、ひとつの作品だけからでは読み取ることができなかった部分が見えてくることもあります。

あるいは「焦点化と因果関係を考える思考」を通して、「……だから……だろう」と類推する力や、自分なりの考えをもつ力を育てることができるのです。

そうなってくると、「あさがお日記」や作文指導の世界を超え、「思考方法の訓練」といっていいかもしれません。

使える題材はあふれている

「あさがお日記」は作文指導の題材となるだけではありません。読書感想文、そして日々の日記指導といった、書く活動全般に結びつけることができます。

さらには、理科の観察実験や、社会科見学といった、他領域での書く活動へと発展させていくことができるのです。

夏休みには、絵日記や読書感想文を宿題として出されることも多いと思います。ぜひこの機会に、子どもたちが喜んで書きたくなる作文指導に取り組んでみてはいかがでしょうか。

白石先生流思考の四要素
- 比較する。
- 比喩を使って表す。
- 原因・因果関係を考える。
- 具体と抽象の行き来をする。